

平成 28 年度厚生労働科学研究費補助金
(地域医療基盤開発推進研究事業)
分担研究報告書

第 11 回 医療の質・安全学会学術集会, 千葉市, 11 月 19 日, 2016 抄録より転載

パネルディスカッション 5

先端医療の現場から考える安全管理～医療の未来を描く～

企画者：安樂 真樹（東京大学大学院医学系研究科 医療安全管理学）

今日の医療現場では、一人一人の患者さんやご家族にとって適切で、また妥当と考えられる医療を提供しているのか、医療者が自問自答することも多いのではないのでしょうか。高齢者終末期と考えられる患者さんに対する胃瘻チューブによる栄養は、その一例だと思います。

先進医療の現場でも、健康に元気に暮らせるようになりたいという願いを実現するために多職種、複数の診療科・部署が極めて人間的なネットワークを構築しながら、また自問自答しながら患者さんと向き合っています。

医療を取り巻く環境は、コストや医療経済、疾病・年齢・社会構造など多岐多面にわたる要素と密接に関連していますが、先進的な医療においては、とりわけ安全性との両立ということも重視されています。今回取り上げる移植のように、生命予後を左右する疾患を抱える患者さんに対して行う医療行為は極めて高いリスクを伴うため、より安全に行う仕組みや体制を作ることが重要です。

一方で移植医療の性格上、その不確実性（例えば脳死臓器提供の機会はいつ訪れるのか予測できない）についても、患者さんやご家族に十分理解してもらう必要があります。安全性を追求しても、不治と考えられる重篤な病気と向かい合うのに、100%確実に安全ということはあり得ません。どう注意工夫しても合併症が引き起こされることはありますし、それが合併症なのか疾患の重篤性や移植医療の不確実性に由来するものなのか区別をつけることすら難しいことも現場の日常です。

ですから単なる手術や合併症の説明に留まらず、移植医療そのものの現状や限界についても十分な理解を得ることが、仮に合併症に直面しても共に立ち向かう気持ちにつながるように感じます。医療安全の取り組みが、患者さんやご家族の安心と信頼、納得につながるものがゴールの一つではないでしょうか。

本シンポジウムでは、先進的医療である移植領域において、チームワークや医療者教育、また医療の妥当性について直面すること、また諸々の仕組みの改善の実際について、移植と医療安全の第一線でご活躍の先生方にお話しいただきます。また本シンポジウムの最後には、脳外科領域の高度な外科治療を支える医療機器やシステムの開発現場から、高度な医療をより安全に提供する取り組みをご紹介します。先進医療にも当然その先端に限界を抱えていることの現実、またそこを突破していかうという取り組みに触れる良い機会となりますので、ぜひご参加ください。